

地域拠点の場づくりに取り組む実践共同体の形成と変容

Formation and Transformation of Community of Practice through Local Place-making

○宇佐神 彩子（関東学院大学）^{*1} 酒谷 粋将（京都大学）^{*2}

^{*1} Sayako Usami, Kanto Gakuin University,

1-50-1,Mutsuura Higashi, Kanazawa-ku, Yokohama-shi, Kanagawa-ken, 236-8501, m25j3005@kanto-gakuin.ac.jp

^{*2} Suisho Sakatani, Kyoto University,

Kyoto Daigaku Katsura, Nishikyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto-fu, 615-8530, sakatani@archi.kyoto-u.ac.jp

キーワード：実践共同体, M-GTA, 地域拠点

1. はじめに

人々が関心や課題意識を共有し、継続的な交流を通じて知識や技能を深めていく「実践共同体（community of practice）」の概念が広く知られている。エティエンヌ・ウェンガーら^①による提唱以降、この概念は社会学や教育学、組織論等の多くの分野で応用研究が展開されている。

こうした理論的背景を踏まえ、本研究では実践共同体の具体的な事例として「こずみの ANNEX」（以下、ANNEX）を取り上げる。ANNEX は、築 50 年の空き家を学生のシェアハウス兼地域交流拠点へリノベーションし、活用するプロジェクトである。その特徴は、拠点をつくる段階から地域住民と協働し、まちの人々にとって必要なものを共に考え、自らの手で形づくる姿勢にある。2021 年度には地域活性化に資する拠点などの整備を支援する横浜市独自の「ヨコハマ市民まち普請事業」に採択され、本格的な改修工事を経て 2023 年度より運営を開始した。2025 年 10 月時点には 46 名の大学生や地域住民が運営メンバーとして参画し、誰でも立ち寄れる「ふらっと利用」と「貸切利用」という二つの利用方法を軸に活動している。

本研究は、この運営メンバーへのインタビューを通じて、ANNEX が実践共同体としていかに形成され、またどのような要因によって変容してきたのかを明らかにすることを目的とする。その分析には、現象の質的側面を把握するのに有効な M-GTA（Modified-Grounded Theory Approach）^②を用いる。

2. 実践共同体としての「こすみの ANNEX」

2.1. 実践共同体について

実践共同体とは、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団を指す。松本^③は、実践共同体の要件として「領域」「共同体」「実践」の 3 つを挙げている。ANNEXにおいては、地域における暮らしや交流をテーマとする「領域」、運営メンバーを核とした「共同体」、日常的な拠点運営やイベント実施といった「実践」がそれぞれ対応しており、ANNEX は実践共同体の要件を備えたコミュニティであるといえる。

2.2. 既往研究と本研究の意義

地域の拠点づくりに関する既往研究には、本研究で取り上げる ANNEX の取り組みのような、学生と市民の協同による交流拠点づくり^④や、都市再生のための建築デザインによるアクションリサーチ^⑤のように、住民と学生が協働し、建築デザインを通じて都市再生を実践的に探った研究がある。一方で、地方中核都市における地域拠点の再構築のあり方に関する研究^⑥や、地域拠点の役割と位置づけ方針に着目した都市構造のあり方に関する研究^⑦のように、都市全体の構造の中でその役割や配置を捉えたマクロな都市計画的研究がある。

このように、地域拠点を都市スケールでの構造要素や、設計・運営手法として捉える研究はあるものの、拠点運営に関わる人々の実践や関係性の変容プロセスに焦点を当てた研究は少ない。そこで本研究では、「こすみの ANNEX」に関わる実践共同体を事例として取り上げ、運営メンバーへのインタビューを通じて、まちづくりにおける実践共同体の実態を明らかにすることを目的とする。

2.3. こすみの ANNEX における活動

「こすみの ANNEX」とは、関東学院大学建築・環境学部酒谷研究室が行っているプロジェクトであり、空き家をリノベーションし学生のシェアハウス兼地域交流を目的とした地域拠点として運営している建物である。本プロジェクトでは、「こすみの ANNEX をみんなで考えるワークショップ」、「こすみの ANNEX をみんなでつくるワークショップ」

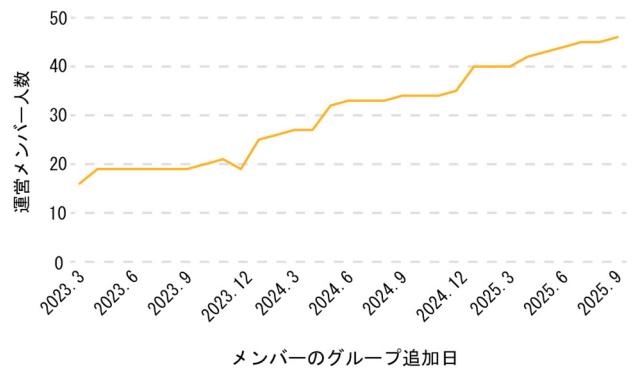


図 1 運営メンバー追加日と合計人数の推移

「ANNEX」などのイベントを開催し、地域住民らと共にこの場所について考え、そこで考えたアイデアを実際につくるという体験から「自らの手で自らの場所をつくる」ということを促し、創造する暮らしの楽しさを地域に広げることを目指している。またこれらのプロセスを通して、この拠点へ親しみを持ってもらい、それぞれの自宅の“はなれ（= ANNEX）”として利用してもらうことを目指す。2020年度にプロジェクトが開始、大規模な改修工事が2023年3月に完了し、そこから本格的な運営段階に入り、現在まで活動を継続している。

2.3.1. 対象建築について 所在地である小泉（こずみ）地区は、人口減少がみられる横浜市金沢区の中でも転入者が多く、若い世代と古くから続くコミュニティが共存する地域である。この多世代が暮らす場所に、様々なイベントやワークショップを通して地域の人々とふれあい、声を聞きながらシェアハウス兼まちの地域拠点をつくる事を目的として本プロジェクトが始まった。改修を行った対象建築は、昭和44年に小泉地区の住宅地の一角に建てられた。2011年3月11日におきた東北地方太平洋沖地震からプロジェクトが開始する2020年の約10年間空き家となっていた戸建て住宅である。



図2 ANNEX 改修前



図3 ANNEX 改修後

2.3.2. つくるワークショップ つくるワークショップは、2021年3月から11月までの期間に計8回開催した。フローリング貼りや壁のパテ処理、左官作業などDIYができる範囲で、空間の整備を行った。工具などを使い慣れていない地域の住民も一緒に活動に参加し、空間をつくるだけでなく、地域との交流も育むことができた。



図4 左官作業の様子



図5 扉の作成の様子

2.3.3. 考えるワークショップ DIYでは行うことのできない大規模な改修工事を行う為に、2021年度の「ヨコハマ市民まち普請事業」へ応募し、整備助成対象のチームとして選定された。そこで、整備内容を地域の方たちと一緒に検討する場として、考えるワークショップを開催した。ANNEXのある小泉地区のことをまちの人たちに教えてもらいながら、お互いができるることは何かをテーマに行った。ANNEXの模型を使いながら、この場所にこんなもの、こんな空間が欲しいといったアイデアを出し、地域拠点としての在り方を皆で検討することができた。



図5 考えるワークショップの風景

2.3.4. 完成後の運営について 2023年3月に工事が完了してから運営メンバーを募集し始め、2025年10月時点では46名の大学生や地域住民による運営が行われている。二ヵ月に1回の定例会議に参加したり、「ふらっと利用」でANNEXを開放したりすることが主な活動内容であり、イベントの際には企画の提案、当日の準備なども行っている。

5月には金沢区の日というイベントに参加し、「なつかし縁日 ANNEX」というテーマで企画を行った。地域の子どもたちと一緒にお菓子吊りやビー玉転がしなどをつくって遊んだり、運営メンバーの方が提供してくれた昔ながらのベーゴマやメンコに挑戦したりしながら地域交流を図った。また、7月に行われた納涼会では、二階から竹を吊るして大きな流しそうめんを行い、厳しい暑さの中、たくさんの子どもたちが訪れた。他にも10月のハロウィン、12月のクリスマスなど、季節ごとにイベントを開催し、地域の拠点としてその役割を果たしている。



図6 流しそうめんイベント



図7 ハロウィンイベント

3. 調査と分析の方法

3.1. 質的研究による分析

実践共同体の変容は、組織構造や活動内容の変遷にとどまらず、参加者の意識・感情・役割の変化と密接に関わる。これらは定量的データのみでは捉えにくいため、本研究では運営メンバーを対象に半構造化インタビューを実施し、その記録をM-GTAに基づいて分析した。逐語記録から概念を抽出し、カテゴリー化と相互関係の整理を行うことで、共同体の形成と変容の要因を理論的枠組みとして構築する。

3.2. M-GTAを用いた分析手順

まず、録音データを逐語録化し、発言内容を忠実にテキスト化する。

次に、「ANNEXの運営における参加者の経験や役割の変化」を分析テーマとして設定する。

逐語録を精読し、発言の中から意味的に重要な文脈を抜き出し、それぞれにラベル（概念名）を付与する。

その後、概念間の共通点や差異を比較・統合し、上位カテゴリーへと整理することで、ANNEXにおける実践共同体の形成・変容のプロセスを抽出する。分析は、新たな概念が出現しなくなる理論的飽和に達した段階で終了する。

最終的に、抽出された概念とカテゴリーの関係性を整理

し、実践共同体の内部で生じる学びや役割変化の構造をモデルとして可視化する。

3.3. 本研究における分析の位置づけ

本研究の最終的な目的は、「こずみの ANNEX」における実践共同体の分析結果を一般化し、他地域の拠点運営や共創的まちづくりの方法論へと応用する可能性を検討することである。本稿ではその前段階として、ANNEX における実践共同体の実態を明らかにすることを目的とする。

3.4. 調査対象と実施概要

本研究の調査対象は、「こずみの ANNEX」の運営に継続的に関わる社会人メンバー5名である。対象者はいずれも、運営メンバーとして1~2年程度活動しており、ANNEX の立ち上げ後に新たに参加した比較的若い世代の構成員である。彼らは運営の中心的な役割を担う一方で、地域住民や学生ボランティアなど他の関係者との協働を通じて活動を展開している。

表1 質問項目

関わりのきっかけ	
1.	こずみの ANNEX を最初に知ったきっかけ
2.	元々こういう活動に興味があったか
3.	運営メンバーに参加した理由は何か
心境の変化	
4.	もっと関わっていきたいと思った出来事やきっかけ
5.	活動を通して自身の中で変わったこと
6.	活動を通して得た学びは何か
7.	ANNEX をどんな場所だと思っているか
関係の深まり	
8.	メンバーとの関わりが自分に与えた影響は何か
9.	ANNEX の所属によって、仕事や家族、他のコミュニティに与えた影響
10.	活動を続けるモチベーションは何か
今後に向けて	
11.	これから ANNEX でやってみたいこと
12.	ここでの学びで活かしていきたいことは何か

インタビューは2025年8月から10月にかけて実施し、1回あたり約60分を要した。実施方法は対面およびオンラインの併用とし、内容は録音のうえ逐語録化した。調査の実施にあたっては、参加者に研究目的を事前に説明し、同意を得た上で実施した。

インタビューでは、ANNEX の立ち上げ期から現在に至るまでの活動経験や、個々人の関わり方の変化、運営を通して感じた意識や関係性の変化などについて尋ねた。表1に示した質問項目をもとに、参加者の語りから実践共同体の内部で生じる意識や関係性の変容を明らかにすることを目的とした。なお、本稿では現段階で得られた5名のインタビュー結果をもとに分析を行っているが、今後は他の運営メンバーにも調査対象を拡大し、悉皆的な調査として分析を継続していく予定である。

4. 分析結果と考察

本研究における分析焦点者を、「地域における関係を繋ぐ

拠点を構想し、実践を通して育てていこうとする人」、分析テーマを「実践共同体の形成と変容のプロセス」と設定する。

分析の結果、9つの概念が抽出され、各概念の関係を検討し、カテゴリーに分けた結果、3つのカテゴリーが成立した。ここではカテゴリー、概念の説明、概念の説明に基づいたストーリーラインを提示する。以下では、生成されたカテゴリーを【】、概念を〔〕、対象者の発言を斜体で表すこととする。

インタビューデータの抜粋力所については、研究倫理を配慮して匿名表記とする。今回インタビューした5名については、インタビュー順にA氏～E氏とし、インタビューデータに登場した別の人物については次の通りとする。例えば、A氏の発言に、B～E氏ではない別の人物が挙げられた場合、順にF氏、G氏、…と表記する。

4.1. ストーリーライン

とある場所に地域拠点をつくりたいと思った場合、【仲間を集め仕掛けづくり】こそが、その後の地域住民との関わり方を考える上で非常に重要な行動になる。拠点というからには土地や何らかの建物が必要であり、ANNEX の場合、社会問題でもある空き家に着目し、[既存の場を再解釈する]ことで拠点をつくった。さらには、拠点をつくる過程での出会い方を考えたり、出来上がった拠点のデザインなどが人を惹きつけたりすることで、共に活動する仲間を集めることができる。集まった【仲間と共に成長する】際には、[拠点を介して関係性が生まれる]ことがある。これはメンバー間での関係性に限らず、ANNEX に訪れるすべての人に該当しており、そこから新たな関わりが生まれる。コミュニティの活動や関係性が盛り上がりことで拠点は成長し、それらを【継続させる】ためのフェーズに入る。1人1人がこのコミュニティに所属する意義を考え、自分なりの関わり方を見出していく。また外部コミュニティでの活動をANNEX に持ち込んだり、ANNEX での活動を外部コミュニティに応用させたりすることで、【学びが循環する】。

4.2. 仲間を集める仕掛けづくり

地域の人に使われる拠点をつくるためには、まずはそこに住む人々に知ってもらい共に活動していく仲間になってもらう必要がある。ただ無作為に人を集めのではなく、そういった活動に興味を持つ人や意欲のある人、またその土地をよく知る人などを積極的に引き入れる為の工夫をすることが大切である。

4.2.1. 偶然の出会いを設計する ANNEXにおいて、「偶然」は単なる偶発的な出来事ではなく、意図的に準備された出会いの土壤として位置づけられている。この「偶然の出会いを設計する」仕組みは、ワークショップなどを定期的に行い、地域との接触を重ねてきたことによるものである。

元々こずみ区に縁のあったA氏は、知り合いのアパートを訪れた際にこのプロジェクトと出会った。

Fさんの八景市場っていうアパートでマルシェをやっていて、そこにこずみの ANNEX の模型が置いてあって。そこで話した若い男性が、まさか自分の母校の先生であるとは知らず…こんなに若い方がすごいなーなんて思ってたんです。(A氏)



図 8 八景市場で展示した模型

また、同じこずみ区で別のコミュニティのマネージャーを務めていた C 氏も、イベントの打ち合わせの際にこのプロジェクトと出会う。

ANNEX の運営に関わる前に、区役所の向かいにある寄り道ガーデンっていうシェアキッチンスペースがあって、そっちの方で一年間コミュニティマネージャーっていうほぼボランティアみたいなことをやってました。そこで、当時始まった金沢区日のイベントの打ち合わせに G さんとか H さんとかもいて、こんなちはって。(C 氏)

回覧が回ってきて、そのお知らせの他にいつもこの辺でやっているサッカーとかね、習い事とかと一緒に ANNEX のものも入ってるんですよ。みんなで壁を塗っている写真とか、その写真を見て、みんなで作ってるんだ、なんかいいなって思って、ボランティアさせてもらいたいって思ったんですよ。私は教師をしているので、やっぱりみんなで子どもたちの自然な気持ちで街を大事にしていきたいなっていうか、そういう気持ちはいいなと思って。(E 氏)



図 9 町内会の回覧板（一部抜粋）

E 氏の場合、回覧で回ってきた紙面を見て ANNEX を知った。みんなでつくる、というコンセプトに共感して運営メンバーとなった。

ANNEX では、プロジェクトを立ち上げてから実際に工事を開始するまでに考えるワークショップやつくるワークショップなどを実施し、地域の人と対話をしながら地域拠点の在り方について検討を進めてきた。

実際に模型を作ったりイベントに参加したりしてその存在を知ってもらい、プロジェクトに興味を持つ人や共感す

る人を徐々に増やしていくという点が、ANNEX の拠点づくりにおける重要なポイントである。

4.2.2. 既存の場を再解釈する もともと何かがあった場所を拠点化する。その土地の持ち主やその土地を知っている人々の思いがあるからこそ、この場所になにこんなものが欲しい、こんな場所になって欲しいといった意見が生まれやすくなるのではないだろうか。ANNEX ができた場所も、元々は 10 年程空き家となってしまった一軒家であった。誰にも住まらず放置されてしまう空き家という[既存の場所を再解釈する]ことで、今では学生が暮らし、地域の人々がたくさん訪れる、小泉地区にとっての憩いの場所となつた。

私がマンションに住んでいるので、なんかキッチンも広いし、庭もちゃんとあって、あ、一軒家いいな~と思って。

…空き家になってたら結構動物がね、まあネズミはもう出ちゃってますけど、空き家じゃないってのもご近所にとってはだいぶ(いいのでは)、あと庭木もちゃんときれいにしてくれるってのも、火事の心配もなくなるし (D 氏)

すごくいい雰囲気ですね。家狭いので、ここでお茶できるなら片付いてるしみたいな。片付けから始めなくていい。リビングは生活の場だからすぐ散らかるじゃない。そういうリビング的な要素で綺麗なままで使えるみたいのは結構いい。(E 氏)



図 10 ANNEX のシェアラウンジ

マンションに住む D 氏は、もともと DIY などをしていましたこともあり、偶然見かけた広報で ANNEX のことを知り、運営メンバーに参加した。自身の家にはない庭や、空間を広くとることのできるキッチンを気に入っているという。また、空き家から人が住める状態に戻ったという点についても、これからますます増えるであろう空き家問題の解決策として良いのではないかと述べている。E 氏も同様に、リビングがあるという空間に好感を持っている。

空き家を全く新しいものにせず、一軒家という形式を壊さずに改修したことで、アットホームな雰囲気のあるシェアラウンジとなつた。

4.2.3. 関心を誘う併まいが出会いを誘発する 現在 ANNEX の運営メンバーとして活動する人の中で、改修工事前のワークショップについて知っている人は少ない。ANNEX では、改修工事を行ったことで普通の一軒家とは異なる外観へと変化した。[関心を誘う併まいが出会いを誘発する]ことで、偶然の訪問や立ち話といった日常的な接触が生まれ、地域の人々が活動へと関わるきっかけとなつている。

ここに ANNEX があるってことを知らずに普通に散歩してて、そしたらなんか、カフェっぽいじゃないですか、オープンとか書いてあって。で、何だろうって覗き込んだら、たまたま G さんとか H さんがいらっしゃって…私がペット連れてたんですよ。チャボ、そう。え、何連れて歩いてるんですか、みたいな感じで会話が発生して、(B 氏)

小泉地区に引っ越してきた B 氏は、自身のペットであるチャボを連れて近所を散歩していた際、通りがかった道で偶然 ANNEX を見つけたという。住宅街の中にたたずむカフェのような外観に惹かれて中をのぞいたところ、中にいた運営メンバーの一人に声をかけられた。



図 11 ペットのチャボ

金沢区の新聞？何とかの風みたいな、なんだったか忘れちゃいましたけど、そこに ANNEX のことが載っていたのをたまたま見かけて、で、運営メンバー募集って書いてあったので、面白そうだなと思って。三日以内に自転車でアンексス見に行って、そのままルンビニーの方で手続きって感じでした。(D 氏)

D 氏が ANNEX を知ったきっかけは、金沢区の広報だった。もともと DIY をしていた D 氏にとって、ほしいものを自分たちの手で作るというコンセプトをもった ANNEX は、とても魅力的に感じたのではないだろうか。

生活クラブの方たちで集まったときも、お年寄りの方が近くに住んでて、知ってたんですよ。アンексスがあることは。でもここが何なのかはわからなくて、ずっと何だろうここ、って思ってたみたいで、(D 氏)



図 12 カフェのような佇まいの ANNEX



図 13 はまかぜ新聞に掲載した記事（一部抜粋）

上記のように、“ここはなんだろう？”と関心を抱いてもらうことは、ANNEX の活動を広げていくためには重要である。また、この関心は拠点が存在する限り生まれうるものであり、初期のメンバーを集めるだけでなく、まだ ANNEX を知らない人を引き付けることもできる。実践共

同体への参加の度合いは 4 つに分けられるが、その中でも、コミュニティに参加していないアウトサイダーをいかに巻き込むかという点が、実践共同体の継続に大きく関わってくる。ANNEX は庭に面した大きな窓、リビングを囲むように配置された円形の土間、パーゴラがデザインの大きな特徴である。建築のデザインは周辺参加を促す重要な要素となりうるものなのである。

4.3. 仲間と共に成長する

実践共同体として成長する段階では、メンバー間の関係構築、さらにはコミュニティの所属意義を共有していくことが重要になってくる。お互いを知り、結びつきが強くなることで、ANNEX が地域拠点としての役割を果たせるようになってくる。

4.3.1. 拠点を介して関係性が生まれる ANNEX の定例会議やイベントの際には、世代を問わず人と関わることができる。運営メンバー間だけでなく、[拠点を介して関係性が生まれる] ことで、拠点が活性化すると考えられる。

(こどもは) 別に好きとか思っていないし、別に嫌いでもないんですけど、でも、年の離れた弟がいて、あの 12 歳下、私が高校生の時に幼稚園児みたいな感じで、すっごい全力で変顔とか、追いかけっことかで遊んであげてたから、それと同じノリが適用できるっていう、(B 氏)

ANNEX のふらっと利用では、外で遊んでいた子供たちが遊びに来ることがある。その際に B 氏は、積極的にコミュニケーションをとり、悩み相談にのったこともあるという。ここでは、普段仕事では接することのない子ども世代と関わることができる。

こっちはこっちで、今の学生さんたちの雰囲気を、吸収できるかわからないけど、触れて、うれしいんですよ。なかなか知り合えないですから。すごく年配か、同世代、か、すごく赤ちゃんとか、意外と大学生くらいが抜けちゃってる。コミュニティとしては、結構若い方が運営してて、他と違うなって。(B 氏)

D 氏は、ANNEX の他にも別のコミュニティで居場所づくりなどを行っている。その活動の多くは、お年寄りが家以外の居場所が欲しいという要望から始めるものだったり、親子で参加できるものがほとんどだという。ANNEX は大学の研究室ではじめたプロジェクトということもあり、子どもも、社会人に加え、大学生が常に関わっている、という点が大きな特徴である。コミュニティ活動において抜けてしまいがちな学生世代と関わる事ができることが、D 氏にとってはとても新鮮なことなのである。

実際に顔合わせないとわからないじゃないですか、その人が何やってるのかとか。結局 I さんの件も、あそこで顔合わせてから、じゃあうちの部屋あるよ～って話になったので、(D 氏)

そこに住んでた Jくん、うちの玄関の前に、階段のデッドスペースがあって、ここを物置にしたいなって、そこ自由にやっていいからって、 ていう話をしたんだけど、

I 氏や J 氏は、このシェアハウスに住んでいた建築系の

学生である。ものづくりをする学生と地域住民との関わりは、ANNEXでの活動をする中で、実際に合って会話をしていたからこそ構築できたのではないだろうか。この様に、拠点での直接的な会話を通して、新たな関係が生まれることがある。

・・・ここ(ANNEX)で知り合ったママさんのお子さんの面倒を見るっていうのを、ここでのやつて、そのママさんは私におひねりをくださったんですけど、今年の春で3,4回くらいやったかな。(B氏)

運営メンバーが地域住民と出会い、新たな関係性を構築しているエピソードである。小さい子を育てる親などは、基本的に保育園や幼稚園でママ友として知り合うことがほとんどであろう。ANNEXを通して、異なる世代、異なる人生のフェーズを生きる人との出会いが可能になる。

4.3.2. 個人資源の共同化 実践共同体が成長する際には、そこでの体験だけでなく、一人一人が持つモノや経験によってコミュニティが活性化することがある。

ダイアリーとか自分のこれまでの経験を基にちょっと貢献できたなと思うときなんかは意味があったかなと思う(C氏)

C氏が学生時代に所属していた部活動では、部室にノートを置いてつぶやきを共有するという習慣があったという。ANNEXでも同じことをすれば、よりメンバー間の繋がりが強固なものになるのではという思いから、ANNEXダイアリーを置くようになった。今では住人が何気ない日常を綴ったり、ふらっと利用やイベントの際の出来事を書き記したり、様々な人の思いを見ることのできる媒体となった。

研修とかしょっちゅう受けさせてもらえるんですよ。鉈とかのこぎりの使い方とか、安全の為のAEDの使い方とか。というのが年に何回かあったり。でそういうしてるうちに私去年チーンサーの研修も受けさせてもらって。あと刈り払い機もできるようになった。(D氏)

D氏は、区で行っている様々な工具や機械の使い方レクチャーに参加している。そこで鉈の使い方も習得していたため、夏に行う流しそうめんでは、実際に竹を分割し、節を削って台をつくることができた。



図14 鉈で竹を割る様子

いつもイベントの企画の話とかになったとき、自分には関係ないけどちゃんと手伝いたいって気持ちがあって、お菓子作りの

道具だけ貸してて、カッターとかもいっぱい持ってきたし、木の伸ばし棒、こういうでかいやつも貸してあげて、ここに紙袋に入れて、置いといたんで使ってくださいみたいな。そしたらイベントの後に、皆さんちゃんと洗って、紙袋に戻してくれて、それを取りに来たんですよ。そしたら、中に子どもたちが焼いたクッキーが入ってて、一枚とかじゃなくて、結構ガツツリ入れてくれて、めっちゃいいなって思ったんですよ。(B氏)

直接イベントに参加することができなくても、器具を貸し出すことの貢献度は大きい。[個人資源の共同化]により貢献意欲や参画意識が高まり、拠点の成長に繋がる。

メンバーが、何か自分の行いでこのコミュニティに貢献できたのではないか、という気持ちを抱くことは、実践共同体を成長させる大きな要因となり得る。それがイベント、行事を達成することでなくとも、モノを貸し出す、提供する、といった行動によって、十分に引き起こされる感情である。

4.3.3. 外部ネットワークを呼び込む コミュニティの内部で動きが活発になると、新しい関係性がやがて外部にも波及していく。[外部ネットワークを呼び込む]拠点として、さらなる実践共同体の進化を促すことができる。

お茶道と着付けを区役所の裏で習って、その先生がほんとはここでやりたいって言ってて、ここでマルシェとかやる感じで、区役所までは通えないけど近くだったら来たいっていう方がいらっしゃるみたいなのでそれはほんとに整えてやりたいな、と(A氏)

A氏が通っている茶道や着付けの教室は、もともと別の場所で行われている。ANNEXができたことで、開催場所に新たな候補ができた。同じ教室の生徒として通うお年寄りの方も、ここであれば、近くて通えるという。

卒園するタイミングで先生たちに何かプレゼントを渡しましたってなったときに、ママさんパパさんに声かけて、先生たちにアルバムみたいなのをつくりましょう。場所はANNEXってところがあって、場所提供するので、ここで集まってワイワイやりませんかってなったら、皆さん集まってくれて、こんな素敵な場所があったんだって。集まりやすい場所があることで、他のネットワークもより繋がりやすくなつたというか。(C氏)

私パーソナルカラー診断とかファスティングアドバイザーとか資格があるんですけども、それをちょっとここでやらせてもらう。ゆったりの方が来てもらう人もいいじゃない。狭い家に呼ぶよりもね。明かりも取れるし、広いテーブルあるし。駅から近いし、とっても近いわけじゃないけどね。ここだったらお茶代タダだからって。(E氏)

C氏は、子どもが通う保育園の先生に花束を渡して送別会を開く予定だったそうだ。ANNEXの運営メンバーとして活動を始めたことで、別のコミュニティだった彼らにANNEXという場所を会場として教えることができた。

4.4. 繼続させる

形成された実践共同体を継続させるということは、そこに所属する人が活動をし続けるだけでなく、外部との接触

が定期的にあるということでもある。

4.4.1. 関わりを調整して続ける 運営メンバーの多くは仕事、子育てなどをする社会人である。別のコミュニティでの活動をしている人も多く、様々な活動との両立が必要になってくる。バランスをみながら、[関わりを調節して続ける]ことが重要であり、それができるからこそ、良い関係性でこのコミュニティを維持していくことができると考えられる。

頑張ってないっていうか、無理してないっていうか、できるところはやるよって感じの気構えなので、そんなに負担じゃない。メンバーも結構いるし、中心の人達がしっかりしてるから (D 氏)

他の活動にも参加しながら、日々の子育てにも奮闘しているD氏は、楽しいと思った活動しか続けていないという。その中でも、生活や仕事を優先しながら、できる範囲でANNEX にも関わるという姿勢があるからこそ、気負わず活動を継続できるのではないだろうか。

今年の四月以降一回も開放日とかできていない気がしていて…、二回くらい予定入れた気がしたんですけど、忙しさでちょっとばでちゃって…、なんも貢献できてなくてごめんなさいって思ってました。(B 氏)

私はもうそんなに入れないから月1でいいやと思ってやっていて、ちょっと大変になっちゃった時は申し訳ないけど、しばらくお休みさせてもらうということをお伝えして、(E 氏)

B 氏や E 氏の場合、仕事や勉強で忙しくなってから、あまり ANNEX の活動に参加できていないことに対して申し訳ないと感じているという。しかし、活動が負担にならない程度であることを前提として責任感を抱くことも、こうしたコミュニティを持続させていくためには大切である。

4.4.2. 多様な契機を受け入れる姿勢を持つ 何のためにコミュニティに所属するのか、それぞれが自分なりの理由を持っているはずである。そうした「多様な契機を受け入れる姿勢を持つ」ことが、継続の要因に大きく貢献する。

ANNEX がなければ、なるべく私ここに、空き家にしちゃってるの (祖父母の家を)、来ないようになって思う。今もすごく後ろめたいので、(A 氏)

A 氏は小泉地区にゆかりのあるメンバーの1人である。祖父母の家が小泉地区にあり、最終的に住みきれず手放してしまったことに対して申し訳なさを感じているという。しかし、昔から知るこの土地での関係を絶やしたくない思いもあり、ANNEX での活動を続けている。ANNEX という拠点が、彼女の想いを尊重する場所となっている。

こういうゆるいコミュニティに入っておいたら、日曜日に流しそうめんやるよとかイベントの話が入ってきて、限られた時間でもある種効率的に地域コミュニティを楽しめるというか、金沢区を本当の意味で楽しめるかなと、(C 氏)

C 氏は現在、仕事、子育てに加え、通信大学での勉強もしており、子どもと思い切り遊べる時間が限られてしまっているという。その貴重な時間を有意義なものにするためにも、ANNEX での活動やイベントに参加することで、自分のやりたいことをしつつ、子どもと一緒にこの地域を楽しむことができる。効率的に休日を過ごす為にも ANNEX での活動が重要な位置付けとなっている。



図 15 子ども達と縁日のあそびをつくる様子

自分って何もしていないなと思っていたことはあります。やっと自分にもできるボランティアが見つかってよかったとも思いましたね。(E 氏)

このように、何かに対して貢献したいと思う感情も、地域拠点を継続させるための大きな原動力と成り得る。

いかなる理由を持っていても、それを受け入れ、コミュニティに関わる大事な一員として接することが重要である。

4.4.3. 学びが循環する ANNEX での経験を他のコミュニティに活用することができたり、他のコミュニティで得た知識を ANNEX に持ち込んだりする、いわば越境的な活動が、実践共同体の継続には必要不可欠といつてもいいだろう。[学びが循環する]ことで、経験が生きるだけでなく、外部との関係も持ち続けることができる。

寄り道ガーデンも、まったくゼロベース、第一期のコミュニティマネージャーだったので、何ができるだろうってなったらやっぱり季節の企画をやろうって。ANNEXに入ったとき、定期的なイベントがないっていうか、突発的にできるような企画が多くだったので、じゃあ3ヶ月に一回、シーズンイベントみたいなものをやれたらいいですねっていうので、流しそうめんとか、クリスマスパーティーとかしたらどうですかねって話をしたので、(C 氏)



図 16 クリスマス会の様子

ここでのアイデアをなるほどと思ってまた別の所で使っちゃうかもしれない、、、笑逆に他のところでよかったですってアイデアをANNEXに持ち込む場合もあるかなと、(D 氏)

ここでイベントをやっている人たちが、他のところでも何かやってるじゃない。そっちのお話を聞くことができたりとか。私がそちらに関わることは今はまだないんだけど、でもそういうのがあるんだなって知れて。こちら辺結構いろいろありますよね。(E 氏)

ANNEX の運営メンバーとして活動する人の多くは、他のコミュニティでの活動を同時にやっている人が多い。だからこそ、上記のように ANNEX と外部コミュニティの知識や経験を交換することができ、ANNEX のさらなる活性化や継続が可能になるのではないだろうか。

絵とか美術作品の展示とかいろいろ企画をして、全部運営をやってる子で、けっこう社会課題とかにも関心のある子なのでそのギャラリーを使って勉強会とか読書会とか、そういうのをよくやってる子で、私も参加者として良く行ってたんですよ。アネックスができたことで、私もそういうの開こうと思えば開けるじゃんと思って、一回やってみたんですよ。二月にチャリティー読書会っていうのをやって、、自分も参加するだけの立場から、いろいろできたのかなって思います。(B 氏)

また、B 氏のように、自身がコミュニティ活動に参加するという立場から、活動を促したり、イベントを開催する立場に変わったという経験は、実践共同体の成長に大きく貢献している事例である。

5.まとめ

本研究では、M-GTA を用いた研究法により、ANNEX で実際に起こっている出来事を分析し、実践共同体の形成と変容を支える要因を明らかにした。今回明らかになったメンバーの参加に際する心理要因、地域拠点を整備する際の建築的なデザインはこうしたまちづくりのプロジェクトの持続性を支える重要な要素であることが示唆された。今後は、本研究で得られた知見を基盤として抽出された概念の構造化を行い、他地域の拠点運営や共創的まちづくりの方法論へ応用する可能性についても検討を進めたい。

文 献

- (1) ジーン レイヴ, エティエンヌ ウェンガー : 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加, 産業図書, 1993
- (2) 木下康仁:定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論, 医学書院, 2020
- (3) 松本雄一:学びのコミュニティづくりー仲間との自律的な学習を促進する「実践共同体」のすすめ, 同文館出版, 2024
- (4) 飯塚 栄斗, 鎌田 吉紀, 熊澤 貴之:学生と市民の協同による交流拠点づくり, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 2019
- (5) 井上 岳, 草野 萌, 辻 知也, アルマザン・ホルヘ:都市再

生のための建築デザインによるアクションリサーチー山梨県市川三郷町を対象として-, 日本建築学会技術報告集, Vol.23, No.56, 661-666, 2017.

- (6) 藤井 祐輔, 太田 尚孝:地方中核都市における地域拠の再構築のあり方に関する研究, 都市計画報告集, Vol.16, No.4, 290-293, 2018.
- (7) 石原 周太郎, 服部 翔馬, 野嶋 慎二:地域拠点の役割と位置づけ方針に着目した都市構造のあり方に関する研究, 都市計画論文集, Vol.49, No.3, 699-704, 2014.